

【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兔記』（明和六年五月十六日～七月二十二日）

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小西 洋子

石川県金沢城調査研究所 所長

木越 隆三

人間社会研究域学校教育系 教授

黒田 智

石川県立図書館 加能史料調査委員

室山 孝

人間社会環境研究科 人文学専攻

渡貫 多聞

要旨

小松称名寺所蔵「烏兔記」は、小松勝光寺十一代住職周好による、明和六年（一七六九）一年分の日記である。特に「小松寺庵騒動」に関する史料として知られている。また、周好が日々伝え聞いた話が書き留められており、小松町周辺のみならず、大聖寺・越前の出来事など、その内容は多岐にわたる。

既存の翻刻は誤脱もあるため、改めて全文を翻刻し、紹介する。翻刻により、多くの研究者の利用に資したい。本稿は三回目である。

キーワード

「小松寺庵騒動」 「郡中御影」 能美郡 近世浄土真宗

【翻刻】

十六日（注）

一、金沢楞庵麦水□□□致候、白溝殿与申象棋見候処、扱々面白物ニ而御座候、委曲其書等者金平屋清右衛門方ニ有之候由ニ而、隣院（注）殿ニ而其書も見申候、

十七日

一、気色者薄曇ニ而御座候得共、兩者一滴も降不申候、差而相替申義無之候、

十八日

一、半七与申木挽、於海老町之後ニ而、中板式尺四五寸斗有之候松木大分ケ致罷在候処、杭たはれ其松木之下夕成半身契ひ不申候由、知照咄承申候、不便成事ニ候、  
一、先頃一朝、江沼郡月津村方上ミへ向候而、胡粉之如ク成物降申候、

月津村之辺者、朝者唯薄白ク相見へ申候、自夫上ミ者上ミ次第、越前府中之辺者、草木之葉之上へ早朝ニ者老部（老部）程宛相見申候、何与云物ニ候哉相知レ不申候、差而寒キ事も無之、つめたき事も無之、唯白々相見申候、先年鼠色之毛降申候事ハ拙覚有之候得共、此降物者何ニ而候哉、承及申事も無之、唯怪敷覚申候、此咄者則隣院殿之御咄ニ而承之申候、此辺も右之物降候哉、咄申者も無之、一向ニ承不申候、

十九日

一、早朝方余程暖ニ御座候処、九頃少々雨降、夫方気色者不宣候、其外何異変成事も無之候、

二十日

一、七過頃、隣院殿越前米脇へ御出可被成旨ニ而御入来、明日出立、三四日も彼方ニ逗留之御様子、御咄ニ而候、且留主中御真影氣を付候様ニ与御申、其儘ニ御帰リニ而候、

一、金沢之者之様子ニ而、二十斗之女房者人連レたる侍、当所本折出町之茶屋ニ而暫ク休息致候内、共連候女を取逃シ、其女者梯川之渡守を頼、後ニ我渡り候事を尋来り候者有之候与も、咄呉間敷与申願、先へ參シ急キ候処、跡方如闇侍者人、其女を尋、息を切して来候、渡守ニ女之様子相尋候処、歎敷両舌セリ、女者暫先ニ渡り、只今頃者町端へ可参与申候得者、早渡具候様ニ申候故、急渡□憐／＼不仕合、盜賊之取手足輕六人并寺井村之番太郎之先方付廻シ居申候者ニ出合、嶋田村之辺ニ而被取、女者梯出町之嶋田屋又右衛門方ニ暫ク被預、其侍者京町宿屋津幡屋方へ被引候、其後七半頃、又其女を足輕共嶋田屋又右衛門方方受取連レ、京町へ參候由ニ而、京町者騒敷旨、連大寺屋半兵衛咄候、其侍吟味致候処、大坂之者之由申候得共、出生者金沢之様子ニ相見申候、

一、当所於稻荷社内狂言致候よし、先頃方取沙汰致（取沙汰）、来月祇園會之頃方致候様ニ申候得共、明日貌見世致相騒キ狂言致候旨、則連大

寺屋半兵衛咄ニ承候、

二十一日

一、夜者明方方雨強ク降候故、隣院殿越前行も明日ニ相延シ候旨、且又御持病も指出候故、右之様子ニ致候旨被仰聞候、

一、昨日盜賊足輕盜人を六人囚へ来候よし、吉竹屋九兵衛咄申候、

一、大殿御道中無障、一昨日御城着被成候ニ付、今日者当所も盆正月致シ候、気色者不宣候得共、夜中者町之内所々之立物、或者淨瑠璃人形遣、又者祇園拍子踊等有之、挑灯・灯笼余程成事共ニ而候旨、咄承之候、

二十二日

一、昨日方時々雨はしめ／＼と降候より外、昼夜共ニ差而相替所無之候、唯徒然成事ニ候、

二十三日

一、朝方気色者宣布候処、七過方雨むしニむし付、以之外暑御座候、殊ニ夜ニ入候而者猶更暑ク候、其外相替養者差而無之候、

二十四日

一、昼四頃方雨強ク降しまき、猶又七過方南風少々有之、雨風しけく相成候、

一、越中超願寺昨日公辺後住職披露相濟候様子、紙面金沢中屋豊右衛門方方本蓮寺殿役僧へ言伝、今暮六頃本龍寺方相届申候、此書状中屋喜右衛門手跡ニ而御座候、取込之様子ニ而他筆も先尤ニ聞候、

二十五日

一、隣院殿越前へ御出、いまた御帰院無之、今日者寺町真行寺御講ニ付、今朝五前方刑部脚殿御出、真行寺御迎ニ罷越候ハ、御真影御長持改メ遣具候様ニ御頼御申置候、依之四前真行寺并御肝煎講中之内五人御迎ニ罷越候処、超覚坊為知候故、則相改メ渡シ、又御真影等相改メ受取申候、

一、昨日方降雨者頻ニ而、夜を通シ明方方余程風有之、雨も随而強ク

降候処、風者四頃方少々静ニ相成候得共、兩者晴間なく降敷、尔今折く吹付、徒然成気色ニ而候、併夜ニ入四頃も成ぬれハ、兩者晴候様子ニ相聞候、

二十六日

一、此頃降候雨ニ而、今朝晨朝過御堂之北之方之椽ニ出見候得者、赤井殿・角院殿之後杯者薄白く登水之溢候様子ニ相見申候、

一、三ツ屋村宝海寺新發意靈授騷動一卷、落着之処承候得者、宝海寺義ハ上ケ寺同事、靈授義者親知浄へ永々御預ケ、宝海寺後住之義ハ本蓮寺目差を以書出可申与之落着之趣、扱々左右方共ニ無詮事、於寺社も直折致候者を其儘ニ而、一日之迷惑も無之、一件之是非者格別、直折之罪咎如何之取計ニ候哉難心得候、右一件落着之事者泥町西照寺新發意賢榮咄申様子ニ而、知照咄ニ承候、

一、当所京町於宿屋夜前騷動有之候、自金沢大坂へ御用方ニ罷登被居候立川兵太夫家来金子五拾兩所持致、大坂方下り候処、途中ニ而被取候故、下り懸所々尋候得共、是迄行末知れ不申候旨咄申候、然ニ如何成訳ニ而候哉、旅宿ニ而自害致候由ニ而彼方へ及断、其人者駕籠ニ而先へ送候

(欠損)

「宿廿四輩」

「宿之露地之松」

之「

「頭をしめ相果」

「相立候砌、通合」

七見候□、猶又其連レ者、六部兩人も其騷動故被留居候よし、超覚坊咄ニ承之申候、是も一昨日夜之事ニ而御座候、

一、此頃之雨ニ而、手取川向ひ三反田村之傍方入川有之候而、御田地少々損シ候旨承之候、今日者朝方気色者宣敷、夜も静ニ御座候、

二十七日

一、金沢紙屋宗意頃日京都方罷歸候処、当郡へ之御使僧御差下シ之義も差留、家司中を初メとして役人中江不殘賄賂を以吞込セ、能美郡を金沢御坊附ニ致候様ニ御取計之義者、加賀公辺へ御頼候得者、成

申義ニ而候与相決シ候故、加賀公辺へ、能美郡一統以後金沢御坊附ニ相成候様ニ、御頼可被成杯ニ相成候与取沙汰致候、宗意義も御坊之御肝煎貌ニ而、能美郡を金沢御坊附ニ可致与之不敬之計、功德聚院様之御墨付も反古ニ可成存念ニ相聞候、

一、加賀殿自江戸登り之砌、越中今石動ニ而、鉄炮を以鶴を打セラレ候処、手くるひたまそれ、女子荅人被打殺候、併其義を隠置候様子ニ相聞申候与、赤井殿御咄ニて承之候、

一、加州殿御着城以来、頃日までも雨之降日も風之吹日も、殺生之止候事一日も無之、鳥獸之失命夥布事ニ候、民百姓をも不顧、国之制罰人をも不貪着、国之難儀万民之嘆キ、金府之悲ミ言語ニ絶たる事共ニ候、且又一昨日者松任迄殺生ニ御出、殿者鉄炮ニ而鷲符を打セラレ、黑白雲之如立騷キ、おしなひく候事、目も当テられぬ哀れさニ而御座候、夫而已ならず此頃江戸方淨瑠璃かたり兩人・役者四人罷登り候、彼是以難心得事共歎斗、他国之聞も恥敷被存候与、赤井殿御咄ニ而是又承申候、

一、於國々加州殿之米塩之朽損シ候而捨り申事夥敷事ニ候、余りく二殿之放埒故、人之口ニ者殿之威もなく、冥加ニ尺候哉与取沙汰致候様子、三谷屋七郎兵衛咄ニ承之申候、扱々悲敷歎敷事ニ候、

一、大聖寺殿公方之西ノ丸御普請被仰付候処、如何哉義ニ候哉、其普請為免候旨及沙汰候段、赤井殿御咄ニ而御座候、

一、今日者、此頃与違ひ、昼夜共ニ静ニ而、宣敷気色ニ而御座候、

二十八日

一、於金沢、何之罪ニ候哉、今日獄門兩人御座候、内荏人者歳八才ニ成候男子ニ而候由、不便成事ニ候旨、安藤喜樂咄申承之候、

一、近年於所々米拔荷致候事、当春相知候二付、於本吉も妙觀屋権兵衛悻、則自宅之前ニ而獄門ニ懸候旨、咄承候得共、能州了覚寺新發意惠福今日迄則於本吉勸化致罷在候処、隣院殿へ帰り相尋候得共、本吉二者一向沙汰無之、権兵衛悻者今以牢舎被仰付置候候二而御座

候由、則惠福咄承之申候、

一、去秋金沢御坊へ金地之御真影御下シ被遊候ニ付、御冥加銀として金子千両申来候処、先頃紙屋宗意持參致上京致候処之金子者、漸式百五拾兩ニ而御座候由、赤井殿御咄ニ承之申候、何様ニ付宗意老人して御坊一杯ニ致シ、我老人ニ而御坊も立申候事之様ニ申成候哉、御坊之内合ニも、御肝煎講中・台所講中等も、唯々申分等有之、且又御暇出候而、烈座御取上被成候超雲寺、色々点削を入候由承之申候、元来超雲寺へ御暇被下候趣も、本者澗法庵与申分致候、ケ様ニ成候由承候、

二十九日

一、朝方気色者宣布候得共、四頃方南風余程有之候処、暮合方風者静ニ相成候得共、何となく暑強ク候処、夜者明近ク七半頃方以之外之南風吹出シ、随而雨強ク降敷、風雨頻ニ荒強ク相成候得共、朝ニ及候得者雨も晴、風も静ニ相成候、

三十日

一、朝方不降雨、不風吹、静成気色ニ而御座候、明日者越中高岡超願寺方へ後住職并婚礼祝義相兼候而、知照を遣申候、  
一、寺社奉行篠原弥助殿義、追付若御老中ニ被仰付候様子ニ取沙汰致候、赤井殿金沢ニ而御聞之由、御咄承之申候、  
一、朝方夜九ツ頃迄者風雨無之、静成気色ニ而候処、九ツ頃方雨降出シ候、併風者無之候、

六月朔日

一、今日者氷室之祝日ニ而候処、夕部方雨降候故、差而〜暑キ事者無之候、唯しめ〜と雨降気色之徒然ニ而御座候、  
一、廿九日之晚越前府中不殘焼失致候旨、大工善太郎咄承之申候、近年之焼失、又候氣之毒成事ニ御座候、  
一、暮六頃方以之外之風雨、扱々徒然ニ御座候、

二日

一、先月五日之大風之砌、越後之辺ニ者雪降候由承候、扱々奇怪之事ニ而御座候、

一、先月廿九日越前府中焼失之事、式百四拾式軒与申沙汰も有之、又七拾式軒与申評判も有之、いまたさたかなる事ハ無之候、唯評義区々ニ而御座候、且又其晚能美郡之内河原山与申処焼失致候由、三谷屋七郎兵衛咄ニ承之申候、

一、昼夜共ニ少々之風も無之、扱々静成気色ニ而御座候、且今江村へ御堂天井之材木を求ニ參申候、則能美屋弥右衛門・北野や伊兵衛同道ニ而參候、

三日

一、今日も以之外快晴ニ而御座候、朝方一針村辺迄用事有之罷越候処、則今度加州殿御帰国ニ付、自公方為御餞別騎馬式疋・鷹ニもと被成拝領、且又為御見送御上使金沢被參候旨、一針村惣右衛門其砌出府致承候旨、同村忠兵衛咄ニ而承之申候、先例も有之候事ニ候ハ、様子無心元存候、且又□□日御入城之節、ニノ丸□□

(欠損)

□忠兵衛咄承□

四日

一、石川郡板尾村肝煎并道場方遣申候手形文言如左、

覚

一、小松勝光寺様

旦那

右板尾村安兵衛与申者ニ違無御座候、為其手印指上申上候、以上、

板尾村肝煎

丑五月

新右衛門 書判

同村道場

次郎右衛門 書判

小松

勝光寺様

右者当寺旦那板尾村伝右衛門忰安兵衛申者、不如意二付、田地等者役人二預ケ道心致候二付、法名并諸国往来共二具候様ニ、右書立を以願候二付、而要共二調遣申候、往来之文言又如左、

覚

加賀国石川郡板尾村道心

浄念

一、浄土真宗

右東本願寺派拙寺旦那二紛無之候、若何方ニ而相果候与も於此方構無之者二候間、御葬可被下候、為其往来手形如件、

加賀国能美郡小松

明和六年六月四日

勝光寺 印

国々在々所々

御役人中

右之通調へ、法名ニ取添遣申候、彼方参候手形月付間違有之候ニ付尋候得者、先日参候ハんと存候所、押水故及延引候段、委曲咄申候、

一、越中高岡超願寺へ入院并婚礼祝義ニ遣候処、今日罷帰候、被辺差而相替義無之候、

五日

(欠損)

勸婦寺殿

本光寺殿

本覚寺殿

勝光寺殿

称名寺殿

右之通申来候二付写之置候、角院殿上座ニ付添状有之候、

一、於越中井波瑞泉寺殿、先頃<sup>（同前）</sup>応現院殿之御法事有之ニ付、為御使僧

御本山方者澗法庵被遣候処、御法事中二三座不参、且御満座日中不

参、依之誠信院殿<sup>（同前）</sup>御腹立被成、右之趣可被為及言上与被仰出候処、澗法庵御詫申上候得共、中々御聞入無之由、承之申候、

六日

一、昨日御本山方御仲間不残為御召、家老中方集会所へ申来候旨、紙面到来致候処、角院殿二者早速二門徒へ饑別打割有之候二付、角院殿門徒之内間候由、はねたや長兵衛咄申候、依之皆々兼而澗法庵杯与之仕継も有之候哉之趣、致推察候与咄申候、扱さて浅ク相見候事、氣之毒之事共ニ而御座候、

一、角院殿集会所方之召状到来ニ付、明昼出立ニ無違様子ニ而、金子七兩式歩兩替被致候由取沙汰致候、御紙面到来後、御仲間相揃就其義御示談与申義も無之候ニ、難心得事共ニ而御座候、且又祖師御真影等御供仕上京致候様ニ与之事共、如何被存候哉、不審ニ被存候、

一、先頃加賀殿殿生ニ御出之処、松ニ驚之止居候処、三拾人頭之者へ被仰付、松江攀上り驚之足をとらへ下り候様ニと被仰付候故、段々其松を上り候処、驚は立行候処を、又被仰候者、攀上り候者ニ、其処ニ

(欠損)

□□候而戻り候□□□

□其弓の弦を可見与

被仰候を御辞対申上、我家之弦ニ候得者、難入御覽与申候を、我言を背哉与御呵有之候得共、何分有之候与も御覽ニ難入、併御伝授被遊候ハ、入御覽可申与御答申上候を、殿之仰候者、然者伝授可致与被仰出候、依之弓を先ニ入御覽、通途之弓ハトマキニ致候得共、我家之弓者糸卷ニ致候、其後二弦を入御覽候得者、加様ニも可有筈与被仰、金子百枚頂戴致、掃笔致候旨、赤井殿御咄ニ承候、夫以後此頃者弓之御稽古専ニ有之候由ニ御座候旨、御咄承申候、且又吉田氏之嫡男者袴着之五才之時者、割矢ニ而小鳥を射扶候、家之格ニ而候、

一、此頃者又馬場ニ而加賀殿馬を撰ひ給ひ候与而、馬数式百程寄させ

御覽被成候処二、三疋入御意候中二、広頸之幅壹尺貳寸有之候健成馬之無異成を洗へよ与被仰、すぞ致候を、乗見よ与被仰付候を、何成者二而不乗、騎馬二名を得シ侍中も不得乗候処二、殿者暫御考被成被爲引出無難騎給ひ、馬場を二辺鞭打而乘廻シ被成候而、被爲仕舞洗候而馬屋へ可入置旨被仰付候、此馬者全体之惡馬二而候を、耳之内へ蠟を壹杯入置候故、無異二相見申候得共、洗候節蠟流出候而、

耳聞へ候故人を不寄不乗候を、被爲考候而御召被成故、被爲乗臥候、併殿者馬上全体上手二而候、右此貳品御聞番方上手之手並付上候旨、則赤井殿御咄二而承之申候、

一、剃髮願申候時分者、役人之請合狀入用二候、其文言如左、

一、剃髮請合狀之事

一、何郡何処誰与申者病身二付渡世難仕候、依之剃髮奉願候間被仰付

可被下候、尤此者御高も預り不申、何方方も無構者二御座候事、

一、御公儀様方被仰渡候趣、毎度私共方申聞セ爲相背申間敷候、其外

万事請合二相立申上者、如何様之義出来仕候共私共相嘖、差而貴寺

様之御苦勞二掛申間敷候、爲其請合証文如件、

請合人 何所何屋

年号月日

何郡何所

何寺様

誰誰

右之通り請合狀出剃髮致、且其上諸国勸進等二而も致度候ハ、又往来狀入用二候、其往来狀之文言如左、

往来

一、何州何郡何村何与申者、宗門者代々何宗二而紛無御座候、今度廻国二罷出申候、所々御因所無相違御通シ被下候、尤何国何方二而相果候与も其所二而御取置可被下候、爲其往来証文如件、

何国何郡何所

年号月日

何寺

国々在々所々御因所  
御役人衆中

右之通相調へ遣申候得者、差而途中指支候事無之候、

一、角院殿京都出立之義ハ、明昼立之様子二取沙汰致候得とも、又者十日出立与申事も有之、評判区々二而慥成義もいまた無之候、

七日

一、集会所方御召并聖人御真影御供致申、仲間六ヶ寺共二上京可致与之事故、此趣町御肝煎講中へ爲知之廻狀、尚又九日四頃迄二来集示談致度与之廻文、当役勸婦寺殿出、助役故加印致遣申候、但シ此頃六ヶ寺御召之義者迷惑成義与申、同門徒之内方見舞之人々折々相見申候斗二而御座候、

八日

一、越中<sup>明</sup>波郡寺家村・同国同郡清水村<sup>明</sup>所之者兩人、廿四輩廻り候由二而立寄申候而、廻廻狀付遣申候、

一、今朝五ツ過二者少々雨降候処、早速二晴、気色宣敷成申候処二、

九半頃方雷震致、夕立之気色相見申候而、七前二荒、雨降下り、暫

時之間二地二流候程降申候得共、又候晴申候、

一、於向本折賊物貳百品程売払、衣類・道具類以外之直二買候処、

其盗人被取御僉議之上、右之由を白狀致候故、向本折へ其盗人を連

越、相尋候得者、其買候事を偽り候故、盗賊足軽方手筈を指、彼是

迷惑人余程有之候旨、妙永寺并今江屋又助咄承之申候、

一、月毎之夜御講二而御座候、講席二而承候得者、何之様子二候哉、

当年者西之講堂二者講釈無之、所化も西御寺内二而者余り見へ不申

由、今江屋市郎右衛門咄申候、

一、於向本折賊物取扱之者共、少々迷惑人等も有之候処、早速二落着

致候由咄承之候、

九日

一、於越後国近年法義論有之、則去年上京致罷在候処、段々御僉儀之

上落着致、各帰国致候、然所御本山之御扱二何之御恨有之候哉、拾式ヶ寺東叡山之附院家二相成候与取沙汰承之申候、

一、先達而集会所方召状到来二付、今日仲間中并御肝煎講中集会致、

段々御請之義二付及示談候処、御真影等御登七申候事ハ、一向難成与申候二付、勸婦寺・本光寺・本覺寺・称名寺共二右之様子二申候、

就夫申合候事も隣院殿二有之候故、角院殿之御真影御供仕度事与被申候後二、拙も左様二存候与申心底を探り見候を、講中方還テ悪敷取成、助役も指除度様子にて示談致二付、色々之事有之候得共、筆紙二難尽事二候、併拙心底二者無之事故、御請五ヶ寺連印二而上申候、唯本蓮寺殿ハ人別二差上候、五ヶ寺連判之御証文言如左、

一筆致啓達候、先以御門跡様御機嫌能被為成御座、奉恐悅候、然者今般御用二付、御家老中方之御下知奉畏候、就夫当郡江被下置候御開山様御真影等之義ハ、御門末一統へ為申間、重而可申上候、恐々謹言、

六月十日

称名寺 印

勝光寺 印

本覺寺 印

本光寺 印

勸婦寺 印

集会所

月番衆御中

追啓申上候、本蓮寺義人別二御請被指上候由二付、拙寺共御請芳々如此候、以上、

右之趣相調へ、十日出之京三度へ相渡申候、本紙執筆茶屋九右衛門二而御座候、且又町飛檐不残御真影之義御登七可申哉与年行事教恩寺方相尋候処、一向二難成趣相答申候、此等之義二付、色々示合茂致候故申出候処二、還而申出候者之恥辱与相成申出、口出致候者ハ傍二而諺意発起之專ニシテ、拙ハ一生涯之面目口惜存候得共、出言

之後無是非事二候、必々予死後二も急成申合者致間布事二候、元来又人之意内探候事者、身分与して者致事二而者無之事二候、前後相考、惣して一切可致事二候、

十日

一、御通夜後示談之趣有之候間、出座有之旨申来參候処、郡法中へ集来之義廻伏遣シ、尚又十人之十村共へも申入度旨、示談相決申候、則称名寺殿も御出席有之、廻伏執筆朝倉屋伝七、且当所町肝煎へも廻伏遣シ被来候上、右之一決可申渡旨相決申候、

十一日

一、当日日中過於隣院殿集来有之候処、角院殿を除キ外五ヶ寺集会有之内、拙義腹痛故余程遅參、且御肝煎講中之内も六七人相見申候、集来之趣者、集会所方之書面之趣十村組手代へ申入候而可然旨相決シ、且又法中者御真影御登申義難成旨、直參道場迄も連印取度旨決談致、文言下書相調へ、御集会ノ面々不残納得之様子二相聞申候、

十二日

一、今朝六半頃俄二雨降出シ、又者晴又者降候、併半者晴候得共、日之内者折へ荒、雨降申候、夜之内も右之通二御座候、

十三日

一、於隣院殿今四ツ頃方郡法中集会有之、御真影之義、仮令御本山方御供之由申来候共、何とやら御殘間候間、為御登申義者難成候、不殘申一決致、則其義二付法中打揃印形致、退參致候内、相滝村松岡寺殿者存寄書二而印被致候、徳久静照寺殿者存寄書も不被致、且御真影為御登之義ハ難成与申切候得共、書物者不致、皆々並居候中二而申候得ハ、是程慥成義無之、間違之筋者差へ無之候与申、其儘

二而被掃候、右之趣共、則隣院殿・本光寺殿・本覚寺殿・称名寺殿・松岡寺殿□「御座候而、慥ニ承之申候、

一、当月八日、於町会所も評判有之□□者、此度御真影之義、御本□

「御頼被遊、御供有之候様□

(欠損)

「之義者、四方八□「則当役勧帰寺殿方被申入、

何茂承知致候、尤成義ニ而候、

十四日

一、朝方快晴ニ而御座候、風者日癡ニ而候哉、頃日者毎日有之候、且拙今八頃方当寺肝煎同行中之方へ、天井出来各方へ世話故之挨拶、

且又後之義相頼申度、芳々見舞候処、何も承知之様子ニ而御座候、一、今四頃方今江四月見舞候処、一昨日御真影粟生江御成被遊候二付、

今般御本山方御供之義申来候得者、処々江御成被遊候義も、当分ハ御止メ被成候而可然存候由被存候与申、猶又彼是評義致候、拙方へ

も示談有之候哉与申候二付、拙申候者、人之御召与者格別之事、元来惣礼之御真影ニ候得者、一日も暫時も御隙可有之義無之候、身分

御召格別与申候得者、閉口致罷在候、且此様子者夜前妙永寺も評判之様子、今江村大町屋権兵衛方ニ而、同所利右衛門咄ニ承候旨咄候

得共、右之趣申聞候、一、串村芝居之義も明晚切ニ相仕廻、弥越中富山へ参候由、則四月咄

承之候、跡へ者政右衛門与申人形つかひ参候由、則同人咄承之申候、扱々不仕合之者共ニ而御座候、併役者共彼是式拾五両借金出来候得

共、右之仕合故先ふせき候由、是又同人咄承之候、□「半頃ニも候哉、村雨降候音致□

(欠損)

「候処、又旁ニ者金沢ニ御坊建立被成被□「様ニ与之義も有之、此義命ニ□「如何之訳ニ而候哉、於金沢御坊御建立

ニ相決候得者、材木者御寄進申、寄銀之分拾貫目ニ、不足之銀子を

丁龜ニまたせ、御本山へ指上候与申候事、蛭川や市郎兵衛於本覚寺殿咄候由承之、灯明寺咄申候、

十六日

一、郡御真影之義此度為御登難申与申二付、金沢御坊方御長持二封付

二頓而之内参候由、長円寺咄ニ承候旨、灯明寺咄申候、就夫昨日赤井殿へ金沢御坊茶所ニ而承候与而申候趣者、追付烈座之内卷人・式

拾人講中之内式三人相添へ小松へ罷越、御真影ニ封を付可申答ニ候由承之候、其節ハ狼籍か問敷事有之候与も御見ぬかし可被下由、誰

ニ而候哉、申置候故、未性名も相知不申候与、赤井殿御咄被成候、是実義ニ候哉、又ハ謀計ニ而候哉、其程難斗候、

一、伊藤内膳殿方へ一家之義ニ候得ハ、本覚寺殿被参候而、咄被申候而も、近習者ニ為留置候故、本覚寺殿も礼屈ニ被思候与、灯明寺咄

候得者、赤井殿被申候者、其義者内膳殿ニ不限、人持以上者皆□

「候由、御咄ニ承之候、□「有之上京可致□

(欠損)

「覚坊を以御□

「之者共□□布御取計被下候様ニ与申候■被申遣候

而、可然由赤井殿取計故、又々使僧正敬方へ被遣候得ハ、可然様相心得候与申遣候、

一、追付妙観寺・灯明寺・真入寺此三ヶ寺者遠慮之義、自御本山方申来候筈ニ候、且又除本蓮寺外五ヶ寺も大体遠慮可被仰出筈ニ候旨、

本折町之髪結方ニ而長円寺蛭川屋八右衛門ニ咄申候由、則蛭川や咄ニ承之候、

十八日

一、町飛檐平僧之分、御真影之義ニ付御供可仕哉之趣、先達而相尋候得者、一統ニ答候者、何共御供被成候事者御残多候間、御供被成間

敷候様ニ申候二付、又々今日於隣院殿志人宛相尋候処、御真影御供



之義ハ御残多候得者、御登セ申間布与者、此度之御上意ニ背候得者、難申候与而、長円寺・正行寺・本龍寺是三ヶ寺者、別ニ覚書致判形致候、西照寺義ハ名代故いまた不相知、其外者御真影為御登申事者難成与申、判形致候、跡ニ而承候得者、難成与申印形致候中ニも、事ニ押レ候而致候様ニ申候寺庵有之候様ニ承候、是者了簡違ニ候、是者大勢之「  
 「誰彼之中候事、委曲ニ難」

(欠損)

「到来之由、則富塚之者ニ逢候所、末々迄触有之候由、彼者咄申候旨承、知照咄承之候、」

二十日

一、朝方以之外之快晴、併七半頃ニも候哉、南方ニ当而少々雷聞へ申候、其外敢而替義無之候、

二十一日

一、今日者村々組手代追々相見、此度自御本山御真影并相添候書物等遂一相揃、持参上京可致旨申来候ニ付、御影之義式、百式拾余村江被下置候義ニ候得者、如何可致旨村方へ相尋候様ニ及示談候、先今日出候人々者承知致候、

一、府津村通願寺、先達而御真影之義為御登難申事、承知判形致候ニ付、本蓮寺ニ被呵以之外迷惑致、且渡世活命之為ニも行当難義致候得者、先達而之判形御除被下候旨申候、先達而之返答前記のごとくニ候、又候今日申候者、先達而も申候通り以之外迷惑致候、私者御真影之義ハ為御「  
 「残多候与申願書之様ニ」  
 「義候ハ、書付」  
 「御座候得共、何卒御」  
 「与申、集会所願」  
 「迄申合、先ハ」  
 「何分其方申処」

(欠損)

(二十三日)

「右衛門方ニ死去」 「参具候様ニ申遣、」 「」

由、就夫七条法「  
 「乍太義金子」  
 「」  
 「被申、拾五両角院殿」  
 「此外昼夜共ニ」  
 「承候、」

二十四日

一、今日者多賀丸出生以来百廿一日ニ而食初二付、隣奥方・御隠居兩人相招申候、朝五頃二者、少々宛両度迄村雨降候得共、暫時之内晴申候而、跡者降不申候、

一、松任町宮丸屋七郎兵衛母死去ニ付七頃葬式、超覺坊諷經ニ出候処、西照寺咄候趣者、一昨日澁法庵大聖持泊、今日郡町法中一統へ申渡御用有之様子咄申候、仕廻次第金沢へ可通様子咄申候与、超覺坊咄候得共、其御越前米脇西光寺殿方隣院殿へ御使僧参、右之趣相尋候処、左様之義ハ承不申、此間京都方罷帰申候、彼地ニ而承候得者、当年者澁法庵大坂御坊之夏之御文被仰付罷下り候様子承、則大坂ニ而澁法庵ニ逢申候旨、越前御使僧慈恩咄申候、

一、米脇西光寺殿寺家慈恩と申者、度々澁法庵方へ心易参候処、澁法庵伴僧円流与申者ハ元来越前地「  
 「出生故、心安咄合申候処、当郡」

(欠損)

(二十五日)

「本折長円寺御真影御講当日ニ候処、去年当役称名寺殿方暫今日之御講御影之御成見合具候様ニ申来候ニ付、赤井殿も跡方御出、且其様子長円寺余儀之趣者、去年六月廿五日之御之散銭、今日迄見合候得共、何之沙汰も無之候、先此訳方相立テ候而、御講之義者可然由御申入候処、段々申訳致候得者、時刻移リ候故、参詣之者へ対シ何とやら迷惑ニ存候間、此訳者今日御講過ニ急度此訳立候様ニ仕度与、分而申発キ候故、先御講者相勤申候、且又御講過ニ、追々御余儀之処、終二者去年之散銭是迄延引致候事、私之不念与申趣を為書、赤井殿へ御取被成、去年散銭八百廿六文受取相済候、此趣皆御

肝煎講中御供ニ參閱居候、無面目事共ニ候、恥辱由、

二十六日

一、來年八月西御門跡様越前吉崎御坊可被成旨、越前府中辺ニ咄承候由、能美屋次兵衛咄ニ承之候、

一、大聖持へ之御使僧者、福井輪番之御使僧最明寺ニ而御座候、此度之御用者福井御坊御焼失ニ付、越前川北御門□ □御頼ニ付、江沼郡御門葉者□ □へ尊敬可致様ニ御頼之□ □

葉□□□

(欠損)

(二十八日)

一、飛檐平僧一統納得・不納得之旨□□人別ニ相尋候得共、西照寺も病氣故、今日出仕之次第ニ、右之旨相尋候処、長円寺同事之義ニ而難背上意旨、口上書致候、

一、今朝方九頃迄者降も不定、晴ニも非ス、折々者唯はら〜と雨降申候得共、九過方者暮七過迄者快晴致候、併七半過頃方俄ニ曇、少々風有之、兩者暫時之間強ク降敷申候得共、早速晴候、

一、角院殿方集会所方到来之御召封之返書之趣者、いまた外仲間者上京之様子も相見へ不申候、就夫拙僧老人上京致候而も可然候哉、又者六ヶ寺相揃上京致候而可然哉、御尋申上候与之趣ニ而被登候旨、西照寺賢榮咄申候様子、來生寺咄ニ承之候、

一、今浜光西寺殿方当月十五日出之書状今日相達候処、頃日承候得者、御本山方六ヶ寺共ニ御召之様子ハ、当春之称名寺殿上京之義ニ付、本蓮寺古へ之意趣を企候哉之趣被申越候、扱々推察之処不違候、

二十九日

一、夜前額見屋平三郎、長保屋利右衛門方へ被居候処、宅方書状參候得者、吉竹屋九兵衛二平三郎被尋候者、勝光寺殿者近日御上京之様子も無之候哉与相尋候、□ □与答候処二本蓮寺者近々□ □

(欠損)

□□□ □故加様 □格別之事共

二而御座候与、則勢州巫共之手代大炊氏、当所会所ニおゐて咄申候、此等之事共相考候得者、謂有当所之義故、信淨院様思召を以、御真影を被下置候様ニも被相考候、加様成事共者、心得ニも可成事ニ候得者、咄置可申旨、九津屋正敬被申候与壇田屋長兵衛咄申候、

一、去年奥州之者上京致、当所京町ニ泊申候節、於当所九津屋次太夫与申者有之候哉与相尋候、於尔今有之由答候得者、彼者申様者、其先祖申は往昔合戦之砌、丹羽五郎左衛門を暫之間御かくまい申置候者ニ而候、丹羽五郎左衛門者当所ニ在城有之、後奥州之二本松之城主被成候、然所ニ今二本松之城主、於丹羽若狭守之館、正月元朝之規式之最初ニ者名代相立、九津屋次太夫年頭之御礼申上候与申候而、次ニ者御家老出候事与、彼奥州之參宮人咄申候而、其由来相知申候旨、長兵衛咄申承之申候、

一、余国余所ニ而例無之、当所限ニ而ハ、若年寄与申者有之、自是町年寄へ者経登申候、是等之謂レ何成故ニ而候哉、尋知度事ニ而候、一、暮六半頃方天曇、電強ク候処、暫時之内ニ雷起リ風少々有之、吹出候処、雨俄ニ降布、半時斗之間者物騒敷事共ニ而候得共、早速晴申候、併電者強ク御座候、

七月朔□□

(欠損)

□分者以外之難□ □之事ニ候、然者格別□ □御坊逢申事難致、併崇敬仕候而、益之有之候義ニ候得者、可然候得共、差而無益事ニ候、依之金沢御坊二者差而崇敬馳走之義難仕候、此義ニ付、備後守領分之寺庵迷惑不調法被仰渡候与も、寺庵才許役所ニおゐて承知不仕候、依之此義御承知無之候ハ、於備後守領地東派無之候而も不苦候、又西派与申も有之候得者、帰山之義可申付候間、左様ニ御心得可被成候与之旨、御本山役人中へ遣候得者、其返答致兼、引手も見苦敷候故、福井輪番最明寺を以、吉崎御坊才許

之義御内々を以御頼有之候与、手を替候与申事、筒金屋久兵衛咄二而承之申候、扱々取但事氣ノ毒サ、手之見候事、以之外氣之毒ニ存候、

一、角院殿弥今日発足、上京被致候、就夫当役之義ニ候哉、隣院殿へ者、其斷御座候旨、勸院殿方承之候、

一、又此夜も暮六半頃方雷電風雨有之候而、夜一杯雨者降申候、雷散早速ニ止申候、

一、於金沢も当郡之評判有之候処、先此度召封者御本山役人中も一番早畏候旨、評義致候段、赤井殿御咄ニ而承之候、

二日

一、降雨者夜を通シ、日之内者晴上りかた、折々者風荒ク雨も頻ニ降申候、

一、能美郡を金沢御坊へ附候ハんと之取計之徒党之者共、御坊烈座之内ニも有之由、是可有咎ニ候、其外於金沢者小立野仰西寺、於松任者聖興寺・本誓寺・真教寺杯、此面々其取計□□□□之由隣院殿□

(欠損)

□勝山屋清九郎□

□御用繁ク只今相濟候得共、最早夜

二入候間參不申候間、此段宣布申上候様ニ申付候与申參候、然所勝山屋二十村共之内証如何与相尋候処、若万一出候而面談致候上、重而引ニ不引候様成義出来候ハ、如何布被存候間、其所難斗被存居候様子ニ相見候旨段々申候、

一、時次郎殿近習者共、名不承、兩人へ殿方御出府ニ而候哉、鎧一縮・

馬意疋拜領有之候、然所時次郎殿其旨御聞被成、鎧拜領致候由、其鎧是へ持參有之候様ニ被仰渡、銘々持參有之候処、今度種々拜領之様、結構成義ニ存、就夫手前義者是迄寺養育ニ相成居候得共、委義不存候、鎧二者色々之名之有候物と承、銘々拜領被致候処之鎧者、何与申鎧ニ而候哉与御尋有之候処、一向何与申鎧ニ而候与申事不存候故、不及御答候得共、直ニ殿へ言上有之、先達而拜領仕候鎧之名

を相尋候得者、手前之近習者共不存候、加様成者共者手前ニ使候事も難成身分、着用之物之名を不知者共ニ候得者、氣ニ入不申候故、隙遣申候与之言上ニ而、彼兩人者御暇被下候由、赤井殿御咄ニ而承之申候、御尤与被存候、

一、夜八半頃二者以之外雷電、風雨頻ニ有之、其音扱々物珍キ事共而御座候、何之事ニ候哉、此由者夜毎ニ有之候、

三日

一、降雨者夜を通シ、五半頃迄者折々風雨頻ニして降も不定、晴も不統候得共、四頃方者晴天ニ相成候処、七過ニ又一雨村立降候得共、

早速ニ晴候而、跡風雨も無之候、

一、七過ニ隣院殿方用事有之□

□今江村□

(欠損)

□右之趣申□

□

四日

一、今朝五頃隣院殿へ參候処、先達而当郡之御真影ニ金沢御坊方封付ニ參候与之沙汰之事者、元来無之事ニ而も無之候、於金沢御坊ニ御肝煎講中寄合致段々評定致候処、是者御本山方御芳書を取受、御本山御手張ニ故、金沢御坊烈座を以被仰渡、此度小松方格別之御使僧願等之事ニ付、御真影郡御成御講之義見合可申与之家老中方被申渡候、委曲紙而ニ有之候与申事ニ致、可然段決談候、且金沢御坊烈座御本山方之御使僧役相勤候事、是例之なき事ニ而無之、先年大聖持へも被遣候事も有之、又ハ越中富山永福寺驛動之砌ニも被仰付參候例有之候得者、不苦趣ニ候得者、左様ニ取計可然与決シ候処ニ、寄合二日目ニ磯部屋五郎兵衛与申御肝煎申候者、是迄御示談之趣御尤二者存候得共、左様ニ取計候時、御芳書之趣承知致候、且御真影郡へ御成之義も承知致候、併去年方相改メ郡法中御門末迄御真影御成を願、御講之義退転無之様ニ与日限を定メ、郡中一統へ申渡置候得者、御講退転之義者一日も難成候、左候得者、於其御坊信淨院様御

免之御真影有之候間、其御影恩借致、御講之義ハ退転無之様ニ致度与申候ハ、如何御答被成候哉、若々御坊御真影之義貸渡難申与候ハ、御講を指止申事は又不敬之至、能美郡者格段之印、又貸渡候ハ、家老中之紙而之訳難相立、其時者是非共ニ御坊方能美郡之入訳相立遣不申候而者難成候、此一段者如何可被成哉与申候得者、各々是ニ而行当り、決談之処も破壊致候与之趣、赤井殿御咄ニ承之申候、

## 五日

一、当月七日徳久静照寺方ニおゐて御真影御講当日ニ候得共、先達書状遣候御、返書ニも難勤与之一往之断故、又候使僧超覚坊を以、右之趣昨日申入候処、一向ニ承引不被致、只何となく七日ニ者難<sup>助</sup>、尚又十五日ニも難勤候間、其通り申呉候様ニ与之訳もなき申方故、埒明不申候間、御肝煎中方七日之講日難<sup>助</sup>問、拙寺方助役故勤呉候様ニ頼候故、俄ニ相勤候様ニ掃除等申付候、扱々徳久之任寺者、儘ニ昇進之身分ニ不似合、冥加を不知、唯角院様殿ニすかされ候様ニ相見申候、門徒ニ付候而も氣之毒成事ニ御座候、

## 六日

一、今般郡御真影御供上京之義、集会所方申來候ニ付、嶋之内講中如何被相心得候哉承度与、沢田武兵衛へ先達而申入置候処、昨日隣院殿寺役ニ御出之跡へ参シ、先達被仰聞候一件、嶋之内講中銘々相尋候処、今度之義者御上意ニ候得者難背、御供御上京有之候様ニ奉存与一統申候与之義申候ニ付、幸赤井殿御出被成候ニ付、其通り赤井殿へ被申上候而、可然候与取次、見証寺取討故、則赤井殿御聞被成候旨、則見証寺咄ニ承之申候、隣院殿婦院被成候而、右之様子御聞、相考候処、嶋之内講中足軽之内者多ク西照寺門徒ニ而候故歟之旨、被申候而、是又見証寺咄ニ而承申候、

一、今暮合方九津屋為水方へ参シ、七夕之発句并歌仙一卷致、九頃帰寺致候、同席子臈・初丁共ニ四人ニ而御座候、扱々面白事ニ而候、

## 七日

一、郡御真影御講、徳久静照寺替ニ相勤候処、快晴故群參大慶不過之覚申候、

一、先月廿日金沢御坊看坊恵光寺、万一三拾ヶ寺程帰山之義も可有之候御者、御聞届被下間布候、及断申候由、灯明寺參候処、伊藤内膳咄ニ承之申候旨、赤井殿御咄ニ承候、且又能美郡之一件共念頃ニ為咄被聞候旨、来ニか、り候処者、繰返シ間被聞候由、是又赤井殿御咄ニ而御座候、

## 八日

一、朝方快晴ニ而候処、昼八頃方雨不降雷なり、七過まで東南之方ニなり申候、其外差而替事無之候、

## 九日

一、加賀殿当年九月又々江戸へ御下之由、於金沢取沙汰致候、其謂者先達之咄之通、公方様御逝去之事違無之候哉、当公方様ニ御成可被成御公達者六才ニ御成被成候ニ付、御一家之内加州殿方近方無之候ニ付、御後見御頭ニ付、当秋江戸御發駕有之候旨、於金沢取沙汰有之候旨、知照承之候、

一、吉竹屋九兵衛当所於童助町笠屋庄兵衛与申者之家を貰、今晚彼方へ移候旨ニ而、暇乞ニ相見申候、扱々存外之立身ニ而御座候、

## 十日

一、当寺祠堂錢御利足御算用場方渡候ニ付、印紙之義本蓮寺へ昨日申遣候処、院主自身之印を致、印紙式枚遣申候ニ付未審、院主上京之事ニ候得者、看坊印ニ而候処を、加様成義難心得与申居候処、今朝紙而指遣申候、其文言如左、

昨日印紙指進候得共、院主留守故、看坊印形ニ而相渡り申答ニ御座候間、昨日印紙御返シ可被成候、取紛罷在、間違之趣ニ御座候、右得御意度如此ニ御座候、以上、

## 七月十日

本蓮寺

役僧

## 勝光寺

## 役僧衆中

右之通申遣候間、又々取替ニ遣申候、兩度共ニ使僧者知照へ申付候、  
 一、昨夜小松西町埴田屋喜兵衛伴喜市与申者連レ老人有之、串へ遊ニ  
 參候処、大領野之松原方追剥兩人出、酒代呉候様ニ与申、彼是命合候  
 内中、彼追剥者逃去ん走出候処を追懸、跡方小刀ニ而脊中をつき、  
 数ヶ所疵を受、行方不知相成申候ニ、又其跡方遊ニ行候者も、彼等  
 之党類ニ出合候与申取沙汰有之候、人数者余程有之候様子ニ相見申  
 候旨評判承候、

## 十一日

一、頃日当所三王宮之神主桜井但馬石見守病死致、規式相濟候後、昨  
 日子息同苗石見但馬守石碑を立候ハんと而、取持之者共を召連出ん  
 とするに、石見但馬守之妻我も連行呉候様ニ申候、然所ニ石見申様  
 者、今日者以之外暑候間、其方行候得者坊主も行候、し而ハ不叶、  
 左候得者若暑氣ニ被当候得者不宜候間、重而涼しく相成候砌、行候  
 而可然与申を、強而行ん申候故、左候ハ、何様共与而供ひ候処ニ、  
 石見但馬守者石碑之才許彼是申合居候処ニ、彼妻子共之磯辺ニ出候  
 処ニ遊山舟老艘有之候を、彼妻子共其舟ニ乗居候ニ、当所御馬廻不  
 破大助と申者声を懸、何成人そ我舟へ不及案内ニも乗居候与相答メ  
 候得者、彼等者桜井石見但馬守子息ニ而候与相答候得共、又々不破  
 氏了簡難成旨申候ニ付、石見但馬守其方へ立寄、不調法成旨詫候而、  
 妻子共ニ我席へ伴ひ歸り暫ク有而、最早暮合ニも相成候得者、可婦  
 妻子共ニ可婦由申入候得共、否之返事も無之間、石見但馬守者子息  
 を伴ひ婦んとする途中へ、連之女房御子息を御掃被下候様ニ申候得  
 者、其儘立掃妻申候様者、先方再三可婦由申入候ニ、否之返事ニも  
 不及、夫ニ恥辱をあたへ、剩其身者共ニ居ながら夫を誑惑シ候事、  
 不及了簡与而、刀之鞘ながら肩先へ切懸シ者、其刀之鞘走、肩先へ  
 五六寸斗疵を蒙候故ニ、取持之者共驚取捧候処ニ、其者又薄手を合、

先是ニ而其場者止ミ、妻者其夜駕籠ニ而荷荷へ山伏方へ送申候、少々  
 短慮ニ者候得共、不破大助へ者石見但馬守之妻与密通之様子共相知  
 レ居候故、歟様ニも取沙汰致候、

一、昼四半頃方青天ニ而候処、唯何となく南風吹起り、九半頃迄吹候  
 而、風者止申候後も、差而雨気色ニも相見不申、吹止候儘ニ而候、  
 余程之風ニ而御座候、奇怪之様ニ覺申候、

一、頃日在京大杉円光寺殿方々、在所同行中并留主居之方へ晝而被下  
 候処、今般六ヶ寺御召之事者相延ニ候与も、一度者上京も可有之筈  
 ニ御座候、併上京有之候得者、先者四五年茂逗留無之候者而ハ、難  
 計様ニ爰元之様子相見申候与之義御申越之旨、則大杉之門徒之中之  
 者咄候様子ニ而、於隣院殿朝倉屋伝七咄ニ而承之候、

## 十二日

一、朝方快晴ニ有之候、日之内差而相替候義者無之候、  
 一、夜ニ入隙居候処、北野屋伝兵衛參候而申候者、金沢御坊方御肝煎  
 講中并御取持講中之人々之中拾五人茂、能美郡一件ニ付在京致、彼  
 是評定致居候様子ニ相聞申候、先日も金沢へ參候歸りニ、金沢御坊  
 御肝煎之中与而、禪門老人上京之様子ニ而候間、相尋候処、御本山  
 御用之義有之候故上京致、盆後ならてハ帰国不仕候与咄候ニ付、粟  
 生村之茶屋ニ而、彼人者金沢之人ニ候哉之由相尋候得者、彼人者数  
 度此辺を往來被致候旨、茶屋ニ之者共咄候由、咄申承之候、若々紙  
 屋宗意ニ而者無之候哉、無心元存候、

## 十三日

一、金沢へ用事有之候ニ付、昨朝知照遣申候処、加賀殿八月頃者能州  
 所口へ御巡見ニ御出之旨、於金沢取沙汰有之候与咄申候、  
 一、暮六半頃山代屋善兵衛爰元台所ニ而咄申候、此間当所荷持之者越  
 前鯖波におゐて問屋ニ泊候処、其夜之内ニ絹上荷壹駄絹七拾疋入被  
 盜候由咄申候、扱々指当り問屋之迷惑ニ而候旨咄之申候、

## 十四日

一、本折浄誓寺且那之内二病死有之候二付、手紙差越候、文言如左、  
口上

拙僧且那永甫屋豊右衛門致病死候、乍御苦勞御伴僧御參詣被下候様  
二被仰付可被下候、葬式之刻ハ此者二御尋可被下候、以上、

七月十三日 浄誓寺 印

勝光寺様

御台所

右之通申遣候二付、葬式時刻相尋候得者、七過与申候事二而、則知  
照并妙永寺兩人へ申付候、追而申遣候者、御伴僧御出之処ニ長柄挾  
箱為御持被下候様ニ申遣候間、又其通申付候、

一、昼夜共ニ差而珍布事者差而無之候、夜中御堂參詣杯者、去年方者  
少々賑布様ニ相見申候、

十五日

一、今朝方快晴ニ者候得共、何とやらむし暑く候処、九頃方雷相聞候、  
九半頃ニ者雨少々降申候而、夫方折々雨ハ唯はら／＼と降申候、雷  
者暮合迄相聞申候、夜者青天ニ而、月も輝ニ相見、時節柄賑布候、

十六日

一、朝方快天ニ而候得共、八頃方当東北之方雲起り雷鳴、山者雨降候  
様子ニ相見候得共、此辺者差而雨者降不申候、又夜ニ入候而者電光  
漑布、於東南之方雨雲群出候得共、雨も降下不致、夜四過頃ニ者何  
国ともなく、雨雲も相見不申如元ニ青天、月輝星照渡り候而、何事  
も無之候、

十七日

一、十五日付之京三度ニ、本蓮寺方留主居へ書状下り候由、能美屋  
弥右衛門咄申候、何様成容子ニ候哉相尋候得共、いまた様子者不存、  
書状參候与斗承申候与相答申候、

一、一昨夜寺井組之内下開発村老軒焼失致候、是者其村之組頭ニ而候、  
至極柔和成者ニ而候ニ、替候取沙汰致候、其村方ニおゐて老人博奕・

盜賊致候者有之候、益前加様成者共嚴布吟味を遂、村方ニ置候間布  
旨、嚴重ニ申渡候、其根本者其人方申出候与申方、其悪ル者方惡ミ  
候而、火を付候哉与取沙汰致候旨、則能美屋弥右衛門咄申承之候、

一、先達而書記致置候三王宮神主桜井但馬守、我妻を様子有之候二付、  
脇指之鞘共ニ打懸候処、肩先ニ疵出来二付、妻之親稲荷護国寺以之  
外腹立致、疵平癒致候迄者妻者但馬守へ預置、平癒後是方御挨拶可  
申与之事ニ候、就夫元來桜井但馬守義、親石見守病死後漸三日之内  
ニ加様成義を起シ、神前之汚を不知者ニ候得者、吉田ハ斷候而、但  
馬守者隱居為致度与之腹立有之、此義不破大助、護国寺之肩持候与  
之義、隣院殿御咄ニ而、甚隱密成由承之申候、

十八日

一、須須谷教願と申者之悴欠落致候二付、若々參候ハ、止置候様ニ  
頼參申候、則当寺之且那之内之者ニ而候、今朝右之趣二付、台所へ  
迄參申置候間、知照為知申候、

一、昨今兩人日武部津左衛門・山茂弥助町下代兩人小松通り、町之分  
見分有之候、何之義ニ候哉相考候処、近日之内ニ殿様当所へ被為入  
候様子ニ相見申候与、埴田屋弥兵衛咄申候、

十九日

一、当月廿一日二本吉江加州殿殺生ニ御越義、弥違無之様子、本吉役  
人共申来候二付、若々不時ニ当所へ茂可被為入事も有間布義ニ而も  
無之間、当所町方も兼而其心得可有与之、当所役人中方内証密ニ為  
知有之候与之義、今朝来生寺咄ニ承之候、併御宿久津屋次太夫宅  
江も掃除ニ義心得も有之候様子ニ□□候得共、頼候処拝参しつらひ  
之様□□無之候得者、能々隱密心得迄之義御座候与之事ニ候、

一、集会所方之書状今日着、隣院殿方參候文言如左、  
一筆致啓違候、先以御所様者御機嫌能被為成御座候、然者其郡御門  
末江信浄院様御免之御開山様御影御供御上京候様ニ、先達而御下知  
之趣申達候処、御影御供之儀、能美郡中御門末江申達候上三而御上

京可有之間、則以御書面御家老中へ申上候処、御承知之御事ニ御座候、然処其後何之御沙汰無之、如何之事ニ有之候哉、此書状相達次第、先達而御下知之通、早速御影御供御上京可被成候、右依御下知如斯ニ御座候、恐々謹言、

集会所月番

七月七日

印

勸婦寺殿

本光寺殿

本覚寺殿

勝光寺殿

称名寺殿

右之通申来、写置候也、〔藏書印〕「称名寺」

〔裏表紙〕

〔藏書印〕「称名寺」

〔藏書印〕「佐々木」

※以上、乾卷、これより先、坤卷

〔表紙〕

「坤」〔藏書印〕「佐々木」〔藏書印〕「称名寺」

明和六年烏兔記

〔称名寺〕

十九日之條

一、前記ニ留置候集会所方之御紙面箱之上包上書如左、

東六条

集会所月番

勸婦寺殿

称名寺殿

七月十四日出

右之通有之候、破封致見候処、御状箱式ヲ、沓箱者仲間へ之御状箱沓者、

本蓮寺殿 集会所月番

与有之候御状箱ニ候故、仲間一統不審ニ覚候、爰元者当月朔日発足被致、越前舟橋泊之様子ニ承居候得共、いまた京着無之哉、且又京着有之候共いまた役人中へ京着之案内ニ不及候哉、様子無心元存居候、且京着在之候得者、遅速五日六日頃二者可被着筈ニ候処、七月十四日出之本蓮寺之御状箱、尚以難心得候与隣院殿与申合候、

二十日

一、昨日集会所方御紙面ニ付、今日朝五時本光寺殿・称名寺殿、并本覚寺殿留主故名代灯明寺出候、御示談決候御紙面返書、文言如左書記可見、

当七日之貴札、同十九日ニ到来致拜見候、先以御所方様方御機嫌能被為成御座、恐悦ニ奉存候、然者先達而御家老衆依御下知御紙面ニ被仰下候、当郡御門末江、信淨院様御免之御開山様御影御供仕候義、一郡御門末江為申聞候処ニ、答之義相濟不申候間、御供之義者重而可申上候、尤拙僧共上京之義者奉畏候、右申上度如斯ニ御座候、恐々謹言、

七月廿日

称名寺 印  
 勝光寺 印  
 本覚寺 印  
 本光寺 印  
 勸婦寺 印

集会所

月番衆御中

右之通相調、今日之京三度ニ相渡候分相決申候、執筆勝山屋清九郎

悴二而御座候、則年行事教恩寺二も申入候処、前記返書■等之趣共可然段申決候、尚又幸北浅井妙永寺方へ御真影御成二付、肝煎講中五六人相見候故、右之段申入相濟申候、

一、集会所本蓮寺へ之御状箱之事、角院殿いまた京着有之候哉否、相尋可申与之旨二相決候故、隣院殿拙与之口上二而、使僧知照を以申入候、先達而今日発足与斗之御状被遣候、何方へ御発足被成候哉、且御上京御発足二候哉、承度与申入候得者、則看坊本龍寺申候者、如仰上京へ発足被致候、則当月朔日出立、同六日二京着被致、役所集会所等へも届有之候段、此間申来候与相答申候、然者申入与之事二候、昨暮合集会所方本蓮寺殿へ御状箱到来致候得共、御京着之事二候ハ、幸当役方も紙面指登候便有之候間、沓封二致可登候間、左様二可被相心得段、可申入旨被申付候与申候得者、本龍寺申候者、本蓮寺殿へ之御状箱、当役方為御登候も、御邪魔成義二候間、是へ被遣被下候様二御答被下候、且何用事二候哉、為登候而可然候ハ、為登可申候、尚又其御状箱者為御登候者、本蓮寺方へ為御登候哉、又集会所へ御戻シ候哉与相尋候、知照申候者、左様成事共者承不申候、何事も而僧之内出られ候而可然与申帰候処二、漸有テ若党を以本龍寺方之口上之趣者、集会所方本蓮寺へ之御状箱之義為御知被下候、何御用二候哉、被致致候上、是方為登可申候間、此者二御渡被下候様二与之義二而候、御状箱者本蓮寺殿之宛所二而候得者、渡申事難成候間、左様二可相心得段返事申遣候得者、使者帰申候、又漸有テ本龍寺參候而申候者、先達而申上候通り御状箱之義者、私へ御渡シ被下候様与申候所二、又為中間候者、先達御彌上京二而候哉之趣、相尋候者、此義二付相尋候、弥京着六日二而、役所江も御届有之候与之事二候得者、幸之儀二候間、為登候因二而、沓封致置候間、左様二可心得段申入候処二再往渡答候様二申、尚又御渡被下候、し而ハ留主居之分相立不申趣二候坏、再三取次を以申候故、取次知照を以又々申入候、此御状箱之義者、本蓮寺殿宛所也、殊二御在京之

事二候得者、為登候而、用義弁シ易ク、尚又留主中從御本山御状箱等之下り候御も留主居江相渡候様与之義無之間、何事も集会所へ窺候而之上之義二候間、左様二可心得旨申聞候所、左様二候得ハ、私留主居之訳も相立候趣二候間、委曲承知仕候与而帰り申候、扱々一笑、何之事二而留主居之分立候事有之候哉、笑敷氣之毒二覚申候、本龍寺帰り候後、氣を得候事有之候、アラ面白ノコト、モヤ一僧和自夫又々集会所江別啓調遣申候、其文言如左、

別啓、本蓮寺へ之御状箱沓封二而御差下シ、随二落手相届可申答二候得共承候得者、本蓮寺上京被致候由二付、為念相尋候、留主居方申聞候者、本蓮寺義者当月朔日発足、同六日京着、即其御役所へも被及御案内二候由、則留主居本龍寺方承候、然者右御状箱留主居へ相渡可申哉、御窺申上候、仍而御状箱先御返進申上候、以上、

七月廿日

右之通調同封二致、御状箱等集会所へ為登申候、本蓮寺殿之義京着之義ハ違有之間布候得共、尔今役所へ者届無之様子二相見申候、必袂邪氣事なかれ、穴賢々々、実二角院殿不敬之至、家老中之御下知を不背体二而被背候義共も有之候、必不可他見他言赦免候、

一、当郡へ被下置候御真影之御裏之年号方当年迄相しらへ候処、信淨院様御免被遊候年号月日者、文祿四己未年十月能美郡惣道場物与有之候、此年代方当年明和六己丑年迄者、百八拾六年二相成候、今年

式百八二年一成申候旨、能美屋久右衛門申候、

一、頭如上人・教如上人大坂御籠城之節、御手支之旨二付、銀子御取替申上候銘々、当郡中二八人有之候与之事、赤井殿御咄二承之候二付、則隣院殿二而其請取披露紙而見候、文言如左、

為御取替之志白銀五百目被指上、遂披露候処、奇特之至二被思召、宜申入旨被仰出候、恐々謹言、

三月廿九日

石井隼人

書判



## 五間堂屋

## 四郎兵衛殿

右之通有之候、唯今此人の子孫於当所有之候哉与相尋候所、見ル影もなきもの老人当所於西町ニ罷在候得共、何様ニ相成候哉、行衛者不存候由、能美屋又助・本屋五郎兵衛答申候、本者慥成町人ニ而候由咄申承之申候、

## 二十一日

一、加州殿殺生ニ御出被成、忝人御拔先へ被為行過、宮腰之辺畦田村左次右衛門与申百姓家へ被為立寄、今日者殿之殺生ニ御出御供被仰付候御近習者ニ而候、たはこ火老貸呉、且又渴候間水老被為乞候所、彼家主之祖父俄火を調べ、茶をワかし候内、彼人之被為問候様者、何与主、此度之殿様之評判者如何申取沙汰ニ而候哉与、主答申候者、宜敷殿様ニ而候与申、何ニも不刷評判承度与再三問、彼主、然者可申、此度之殿様者御殺生好故、度々御出被遊ニ付、御領国之分ハ何方へ御出被遊候而も違背申者ハ有之問敷候得共、併田島を耕候節御出被遊候得者、鋤鎌之立所相違申候故、因候一日之仕事余り候間、又明日も其余りを少取掛候、相考候所五夕老合之損与存候得共、積重候得者夥敷、殿様之御損失ニ而候間、此砌者御殺生ニ御出不被遊候ても不苦間敷様ニ被存候坏申居ル中へ、御家来方漸御尋申上、被百姓家へ参居候所、右之通輕キ侍問事之取成故、御近習家主是ハ殿様ニ而候与申候得者、家主大怖畏致、曲身尊敬之体ニ相見候処ニ、則殿不苦宜ソ為申問候与而、金子式両拝領仕、殿様者其儘御発足有之候旨、赤井殿御咄ニ承之候、

一、先頃加州殿殺生ニ御出被遊、鉄炮被為打候ハん玉薬を加へ、口薬へ火繩を被為落候所ニ、玉一向ニ抜不申候を、玉口を引立、殿者被為視見候を、御草履取殿之鉄砲を無理ニ引取江之中へ入候得者、

七里道専(承)

## 書判

忽玉拔出、御草履取之眼蓋少々疵を蒙候、然所ニ殿之危を救申上候与申事ニ候哉、御徒ニ被仰付、六拾俵三斗式升御扶持頂戴致候、是等者雖有思召ニ而候、是等之様子共相考候得者、由良之助風ニ而、元来臆痴之様ニ者相見不申候与之御評、於金沢ニ有之候与之由、赤井殿御咄候、

一、殿於城中ニ之御殺生止候、元来者先頃時次郎殿御伴ニ而御城中ニ而將を鉄炮ニ而被為打、面白候哉与時次郎殿へ御尋候所ニ、幼童之砌方久布武道を捨置候得者、鉄炮之面白キ事者不得存候、尚又御下夕之者ハ何ニ不寄、殿之哀愍を御加候而可有候、殊ニ御城中之者者禽獸草木ニ至迄、不残御家来同事ニ候物を、殺生被成候而、面白思召候味者不存候御答被成候、然ニ其後方御城中之殺生者、堅相止候与之旨、則赤井殿御咄ニ承之候、

一、去年八月五日ニ当郡三ツ屋村宝海寺新発意靈授、寺社奉行所へ直訴致候、此砌角院殿越前燈廻ニ被出居候ニ、爰元飛脚遣シ候故掃寺被致、段々示談も有之候上、又々澗法庵示談之為、同月八日ニ寺発足有之、京着之節、土足旅姿之其儘ニ而、先澗法庵方へ被参、遂示談、直ニ其日草津泊ニ而、同月十五日ニ被致掃寺候与之事、昨日灯明寺咄ニ而、則角院殿被連候家来之者方承候旨咄之申候、一向ニ不存事、寄特之珍事ニ而御座候、初而承、皆々驚入申候、

## 二十二日

一、在京本蓮寺方留主居へ遣候十五日着之書状者、唯何与なく、また何ノ御沙汰茂無之与之事、角院殿へ出入之者咄候旨、来生寺咄ニ承之申候得共、用義有之隣院殿へ参候処ニ、十五日着之書状之趣者、先達而角院殿斗京着澗法庵方へ被見廻候処ニ驚入、是者外五ヶ寺も上京ニ而候哉与相尋候、本蓮寺被申候者、外五ヶ寺者上京之様子も、また相見不申候故、先老人上京致候与被申候得者、澗法庵申候者、老人上京ニ而者御用難弁候間、先京着之案内可及延引段、澗法庵指図ニ依而、先今日迄見合申候之様子、申来候故、以之外留主居共不

機嫌二候与之様子、筒金屋久兵衛右之趣承申候旨二而承之申候、如何様左様成義二而候哉、前後不都合之義共留主居方申聞候事共一二有之候、

一、本山取嘯之義二付寺法之通二可致、寺社所へ申出断々聞布事、是以後不可出不承届与之義、与力共方本蓮寺へ被申渡候与之旨、金平屋清右衛門咄二承申候、虚実之程難斗存候、併有聞布事二而も無之、先達而灯明寺出府致候而、伊予國内当郡一件之様子咄置、何歟国方へ御頼与申事、尚又本蓮寺方断届与有之候而も、御聞届無之候様仕度、万一能美郡之義二付断届等之義御聞被下候ハ、能美一郡之騷動二相成、且国法御難題与可成義共も有之聞布義二而も無之候得ハ、何歟御聞届之義者無之様二仕度御頼申候与申入候故、右之義申来候哉、無心元候、

一、信長公对本願寺及合戰候二付、頭如上人・教如上人・大坂御籠城之節、大坂落城無之故、信長表裏之心を以、本願寺和睦之義、達叡聞候得故、被掛叡慮勅使を以、信長一和之義、大坂へ勅命有之候得者、無是非籠城退出之節、伏勢二而、日頃之怨不敬情挟邪心候而、右之通二致候得者、頭如上人者勅命大坂御退出、紀州へ御引越候得共、教如上人者様子御申立、大坂二被為殘、法流破滅を淺間敷被思召、粉骨碎身之御門徒中へ仏法再興之思立、聖人へ報謝之志於有之者、抽忠節兵糧加勢可致之由、御頼有之候二付、当郡波佐谷村へも御頼之御書有之候義、妙永寺咄申候間、掛意相尋候処、手二入候故写置候、御頼之御書御文言如左、謹而可致拜見者也、

急度染筆候、今度当寺信長就一和之義被掛叡慮、既御門主至紀州御退出候、然者蓮如上人已来数代之本寺、此度可破滅段淺間敷歎入候二付、予一身を殘シ、是非共可相拘思立候事二候、各得共意、一宗之法流相統候様二尽粉骨抽忠節馳走候者、偏仏法再興、聖人江可為報謝、就夫候而者法義嗜、称名念仏油断有間鋪を肝要二候、尚按察法橋可申候、穴賢々々、

五月廿五日

教如御判

加州能美郡

栗津惣中

波佐谷惣中

右之御書、波佐谷村二有之候由二付頼置、朝倉屋伝七方方借用致、写置申候、此御書を手之内之御書与申候由、則伝七咄申候、相考候処、当郡之御真影も是等之功二依而被下置候哉与存候、又々此義共相尋髓御真影被下置、能美郡惣道場物二被為成候根元共承候様二可致事肝要也、其義二付候而も宣布候ハ与存、御書写置候也、

## 【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』 (明和六年五月十六日～七月二十二日)

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小西洋子

石川県金沢城調査研究所 所長

木越隆三

人間社会研究域学校教育系 教授

黒田智

石川県立図書館 加能史料調査委員

室山孝

人間社会環境研究科 人文学専攻

渡貫多聞

### [Research Materials] Supplementary Note and Reproduction of Utoki in the Collection of the Shomyoji Temple in Komatsu

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

KONISHI Yoko

KIGOSHI Ryuzo

KURODA Satoshi

MUROYAMA Takashi

WATANUKI Tamon

#### Abstract

Utoki was a daily journal kept by Shuko, the eleventh chief priest of the Shokoji Temple in Komatsu, during the year 1769. The journal is famous for the historical information it contains on Komatsu-jian-sodo. Utoki not only has important information about the Jodo Shin sect of Buddhism in the Edo period but also various stories that Shuko recorded that should capture the interest of researchers. It is our intention to introduce a reprinting of the entire text in several installments. We hope that researchers will use our reprint to deepen discussion on Komatsu-jian-sodo.

**Keyword:** Komatsu-jian-sodo, Gunchu-goei, Nomi-gun, early modern Jodo Shinshu sect